

## 「光学界の進展」号の進展

梅田 倫弘

(東京農工大学)

日本の四月は、いい。桜が列島をかけ抜け、やがて樹々の緑が芽吹く。学校には新入生が、企業には新入社員が組織を若返らせる。日本光学会も、本誌の「光学界の進展」号が、四月の到来を告げる。

進展号は、本誌の前身である「光学ニュース」(光学懇話会) 1964 年発行の No. 77 に起源を求めることができる。その冒頭に企画の意義を次のように記している。「年頭にあたり前年度を回顧することは、公私について有意義なことですが、光学ニュースの新しい試みとして、1964 年度光学界における進歩発展ならびに活動状況を分野別に展望していただきました。… (以下略)」

以後、本誌に発展継承され、途中「光学界の展望」から「光学界の進展」にマイナーチェンジがなされたものの、編集企画の趣旨は以下のように現在とほとんど変わらない。「国内の展望を主にしていただきましたが、国外において著しい発展があったもの、あるいは国内の事項と特に関連のある事項について述べていただきました。(中略) 紙数も限られますので、『担当の方のご専門により重点的に特定の項目について記述し、必ずしも全分野をカバーするものでなくてよい』ことを原則としてお願いしました。」

進展号が刊行される四月は新配属の時期であり、光学界の最新動向を勉強する貴重な資料となりうること、現執筆者に来年の執筆者を推薦いただくことで分野ごとにバトンをつなぐことによって光学界の将来を担う人材発掘の役割も果たしてきたように思う。進展号にまつわるエピソードとして、応物学会での大学院生の発表がその学生の氏名とともに取り上げられ、学生が大いに自信をつけたことを思い出す。

このように 46 年あまり本誌の中で重要な役割を果たしてきている進展号ではあるが、この数年、編集委員会では執筆のモチベーションを高める工夫が必要であるとの共通認識のもと、さまざまな検討が行われてきた。今回、編集委員会のご努力下、本学会に所属する 14 の研究グループの代表者の方々に執筆者を推薦いただき、各グループにおける研究分野の進展を俯瞰していただく企画が結実した。研究グループの関係者には多大のご負担をかけることもあろうが、研究グループの活動を知らせることでグループの活性化やメンバーの増加も期待できる。

新企画の本号が、四月にふさわしい企画として会員諸氏に届くことを願っている。